劉翔選手の棄権に思う　～スポーツ選手の心情に理解を～

八月一八日、北京五輪陸上競技男子一一〇ＭＨで優勝を期待されていた中国の劉翔選手が、怪我により予選を棄権した。これに対し、中国国民からは同情の意見と同じ程度に、劉翔を非難する意見が寄せられているという。劉翔の怪我を信じたくない国民は「五輪前に自分の世界記録を破られて、怖気づいたに違いない」とか、「勝てそうにないから逃げた。棄権なら自分の価値が落ちない。」などと言い、インターネット上では「中国一三億人の恥」「落ちぶれ劉」等という記事が踊った。劉翔の得た富に対するやっかみもあったと思うが、何と心無い言葉であろうか。

北京五輪は中国にとって近代国家として世界にその存在をアピールするための、まさに国家的事業であった。その流れに乗って選手や国民が勝利至上主義に陥るのはある意味では止むを得ないと思う。しかし、スポーツには不可避的な内在的危険が含まれている。即ち、選手は勝利という目的のために、常に怪我と背中合せのギリギリのところで、日々生身の体を鍛えている。従って不本意ながらも大会直前に怪我や病気で出場を断念せざるを得ないこともある。今回の五輪でも日本代表選手であるマラソンの野口選手をはじめとして、怪我に泣いた選手は多くいた。

ところで、今夏も県内では少年サッカーをはじめとして各種のスポーツ大会が開かれた。その中で怪我や病気で出場できなかったり、実力を発揮できなかった選手も多くいたであろうし、そのために所期の成果を挙げることができなかったチームもあったと思う。そのような場面を目の当たりにして、指導者や保護者、更には応援する者は何を考えるべきか。まず、一番悔しく、責任を感じているのは選手であることに思いを致すべきである。そして、優秀な成績を収めた選手に対して贈るのと同様、不幸にして結果を出せなかった選手にも、

その日常の努力に対して讃辞を贈り、同情し、次の活躍の場に期待を寄せてほしい。優秀な成績を収めた選手は名誉という至上の喜びを得て誰からも称賛されるのに対し、結果を出せなかった選手に向けられる目は冷ややかである。しかし、このような選手が再起を期し活躍するのを見るのは、まさにスポーツ、否各人生の醍醐味である。

　スポーツ指導者の育成事業に携わる者として是非皆様にお願いしたい。

【平成２０年８月２７日　静岡新聞　朝刊　掲載】